新着案内

町田の文学

第 48 号　2021.2.1 発行　町田市民文学館ことばらんど

遠藤周作直筆資料を新収蔵

「喜劇 新四谷怪談」草稿

三月二八日(日)まで展示室にて公開

今年度、当館では遠藤周作の直筆資料として新たに戯曲「喜劇　新四谷怪談」の草稿を購入いたしました。本作は一九七四年一〇月に〈書き下ろし新潮劇場〉の一巻として発表された、遠藤にとって最後の戯曲です。

単行本刊行と同月、栗山昌良の演出で劇団「青年座」によって渋谷の西武劇場で初演されました。小説の仕事としては『死海のほとり』を発表した後で、次の『侍』のための調査を始めた時期に当たります。

劇作家・矢代静一が、本作の公演プログラムに掲載された遠藤との対談で「遠藤周作が小説の方で一貫してやっている、キリスト教が日本では根付かないのではないかと云うモチーフのバリエーション」と指摘しているとおり、日本におけるキリスト教受容の問題が通底している作品です。

ただし、タイトルに「喜劇」とあるとおり、ユーモアエッセイの名手でもあった遠藤らしい軽みがあり、そのテーマはオブラートに包む形で描かれています。

「喜劇　新四谷怪談」パンフレット（1974 年　西武劇場）
表紙デザイン：田中一光
イラスト：和田誠

現代によみがえる怪談

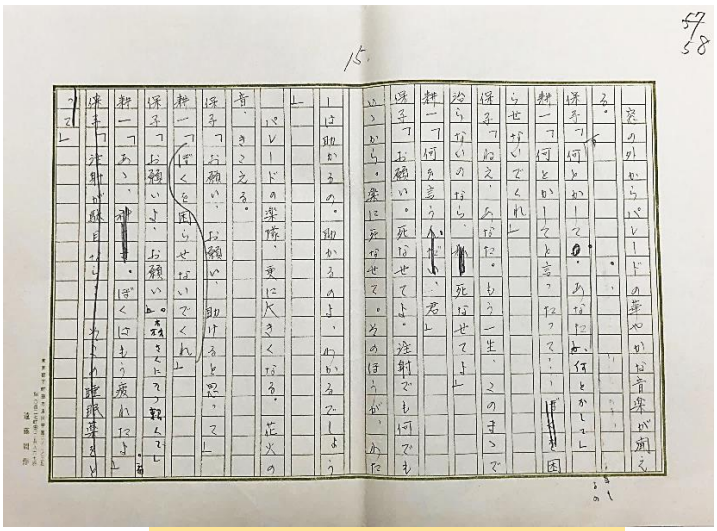
資料の解説に入る前に、あらすじを簡単にご紹介しておきましょう。

舞台は、建てたばかりの耕一・保子夫婦の新居。新築祝いに来た友人たちが、酒を飲んだり歌ったりと楽しんでいると、九時四〇分に急に時計が鳴り出します。越してきてから毎夜のことだと不思議がる保子。

実はここは曰く付きの土地で、以前建っていた家でほかに女ができた夫が妻を殺しており、その事件のあった時刻がちょうど九時四〇分だったのです。それを

知っていた友人が虫の知らせを感じたとおり、保子は次第に身体が麻痺していく不治の病に罹り、遂には自死を選びます。二年後、耕一が友人の一人であった女と再婚して同じ家で暮らし始めると、死んだはずの保子の唄が聞こえてきて……。

言わずと知れた本家「四谷怪談」は、夫・伊右衛門の身勝手で殺されたお岩が幽霊となって復讐を果たす物語ですが、本作はその単純な現代版ではありません。伊右衛門に当たる耕一を「気が弱く妻に尽くす夫」、お岩に当たる保子を「わがままな妻」というキャラクター設定にするなど、独自のアレンジが加えられています。

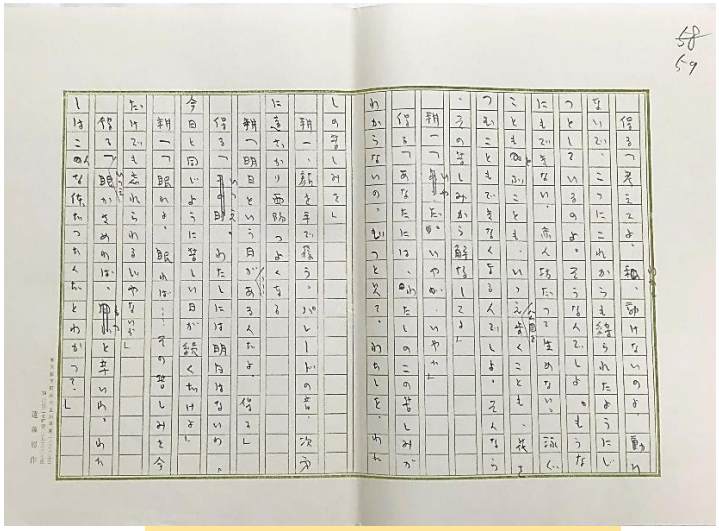


「喜劇　新四谷怪談」草稿 58 枚目
秘書による清書稿

秘書の清書稿で作品を客観視

本資料は、秘書による清書稿（「東京都下町田市玉川学園」の住所が印字されている原稿用紙の表面使用）がベースになっていますが、遠藤の手によって加筆・修正した跡が散見されます。

秘書による清書稿に校正を入れるのは、一度書いたものを他者の筆跡で読むことで客観視し、見直したいときに採られた手法で、小説作品でもしばしば用いられています。こうした方法で書かれていながら、全一一一枚のうち五九枚目から六二枚目は、秘書が書いた部分はなく丸々遠藤の筆跡になっています。



「喜劇　新四谷怪談」草稿 59 枚目
自筆部分

該当するのは、自分が不治の病に侵されていることを知ってしまった保子と、耕一の対話の場面。この四枚だけが真筆なのは、展開を大幅に修正したために差し替えたからだと考えられます。この部分は秘書の清書稿が残されていないため異同を検証することはできませんが、直前に当たる五八枚目の最後に書かれた保子の「注射が駄目なら……そこの睡眠薬をとって」という台詞が削除されている点は、注目に値するでしょう。

差し替え後の原稿では、保子が自分の苦しみを吐露し、耕一にそれを分かってほしいと訴える展開になります。睡眠薬については、耕一の方から「眠れば……その苦しみを今だけでも忘れられる」と、医師の処方に沿った服用を促す流れに変えられています。耕一は自分の手で睡眠薬を飲ますことはしませんが、保子の手の届くところに薬瓶を置いて部屋を出ていきます。

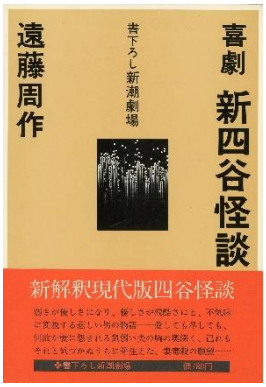
「同伴者」の対極にある「善魔」

遠藤は、このような耕一の人物像を「善魔」という造語で表現しています。本作を発表したのと同時期に書かれた「善魔について」というエッセイによると、「善魔」とは「自分の主義、自分の宗教だけが正しい」と考え、「その独善主義のために他人が傷つけられ、不幸になっていることにも無神経」な人のことで、その言動は「それが大義名分の旗じるしで行われるだけに

ほかの迷惑や傷より大きく、深い場合さえある」と指摘しています。耕一は一見すると善良な人物に思えますが、苦しむ姿を見るに耐えないというのは、相手を思ってのことではなく、エゴとして描かれています。

保子の心に寄り添おうとせず、結果的に彼女を追い詰めていく耕一は、遠藤が『沈黙』や『侍』などで繰り返し描いている、苦しみや哀しみに共感し傍にいてくれる「同伴者」としてのイエス像とは対照的であり、この改稿は、そのことをよりはっきりと描き出すためにされたものだと推測できます。作品の核になる場面を執筆する際に、思索を巡らしたことが窺い知れる資料です。

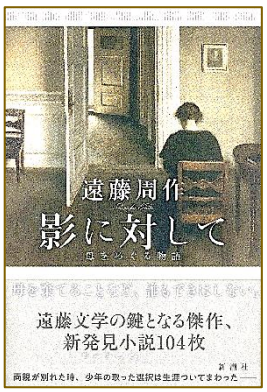
なお、完成稿と比較すると名前の付いていない登場人物がいるといった細かな差異があるため、この草稿にさらに手を加えたものを完成稿にしたと考えられます。



『喜劇　新四谷怪談』
（1974 年　新潮社）

長崎で未発表作品発見！原稿用紙が語る執筆時期・作家の意思

遠藤周作の原稿といえば、昨年、長崎市遠藤周作文学館の収蔵資料の中から未発表小説が発見され話題となりました。タイトルは「影に対して」。父母について書かれた半自伝的な内容であることや、主人公の名字が、『海と毒薬』や『スキャンダル』など遠藤作品において繰り返し登場する「勝呂」であることなどから、極めて重要な作品と評されています。



『影に対して
母をめぐる物語』
（2020 年　新潮社）
見返し部分には２枚の自筆原稿が印刷されており、推敲の様子が確認できる。

執筆時期は一九六四年後半から六九年後半の間と考えられていますが、それを特定する手掛かりとなったのは、原稿用紙に印字された住所でした。

本作で使用されている原稿用紙は、「喜劇　新四谷怪談」とは異なり、「東京都町田市本町田玉川学園」と書かれたもの。住居表示の変更を受けて作成し直されたため、町田市居住期間に使用していた原稿用紙は、実は二種類存在しているのです。

遠藤が市内に転入したのは一九六三年三月、住居表示が「本町田字玉川学園」から「玉川学園」に変わったのは六七年七月のことですが、きっちりそのタイミングで切り替えたわけではありません。六四年半ばまでは以前住んでいた「目黒区駒場」の住所が入ったものを使用し、「本町田玉川学園」版は、その後から六九年後半まで使用されていたことが、遠藤周作文学館の調査によって確認されています。おそらく印刷済みの在庫を使いきり、増刷が必要になった際に住所を修正していたと思われます。

発見された一〇四枚のうち、二枚が遠藤の手で書かれた第一稿、残りは秘書による清書稿です。その二枚は原稿用紙表面の升目ではなく、裏面に細かい文字で書きつけられています。

一枚に書かれた文字数は、通常の四〇〇字詰め原稿用紙に換算すると約六枚分に当たります。このように裏面が使用されているのは純文学作品に限られたことで、頻繁な用紙替えによってリズムが崩れることを防ぎ、執筆に没入できる環境を作るための独自の手法と考えられています。このことから「影に対して」は、純文学作品という意識で書いたことが窺えます。

残された原稿用紙が、綴られた言葉だけではなく、そんな情報も伝えてくれたのです。

「喜劇　新四谷怪談」草稿は、二階展示室で開催中の「20×20原稿用紙展」において、初公開しています（三月二八日(日)まで）。

遠藤の小説やエッセイには親しんでいても、戯曲には触れたことがないという方も多いと思います。この機会にぜひ、作品をお手に取ってみてください。

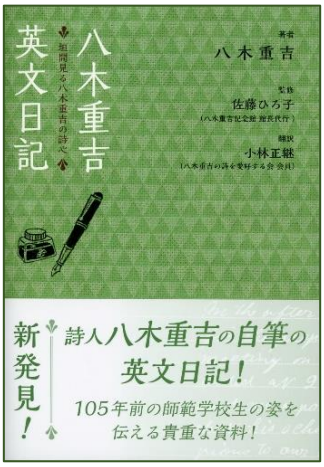
（学芸員　杉本佳奈）

新　刊　紹　介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。
著者紹介は「著者略歴」などをもとに作成しています。

１９１５（大正４）年の八木重吉英文日記（翻訳）
―垣間見る八木重吉の詩心―

八木重吉／著　小林正継／翻訳　佐藤ひろ子／監修
八木重吉英文日記刊行委員会・いのちのことば社　2020.10



二〇一八年の暮れ、ホコリをかぶった古いノートの山の中から、英語で書かれた一冊の日記が見つかった。詩人・八木重吉が鎌倉の神奈川県師範学校時代、一六歳から一七歳の時期に、英作文の練習のため書いたものが、一〇〇余年の眠りから覚めた瞬間だった。

一九六一（昭和36）年の火災で、重吉の学生時代の日記や文章が消失してしまったため、これは当時の重吉を知る貴重な資料だという。英作文の練習のためか、その日に起きたことを淡々と綴っているが、そのことがかえって、まるでそこに重吉がいるかのような臨場感を感じさせる。時折、（雪を解かす雨が軒から落ちる音に）「それは何か哀しいものについて／僕に話しかけているように聞こえた。僕の周りを見たけれど、僕を助けて／くれるものは無く、僕だけだった。／孤独！そう思わざるを得なかった。」（一月一〇日）など、詩人の片鱗を感じさせる記述も見ることができる。「今日は何も特別なことは／なかった。」（一一月一九日）という日もあるが、一日も欠かすことなく書いており、真剣に英語に向き合っていた若き重吉をほほえましく思える。

このノートを発掘し、刊行した八木重吉記念館館長代行・佐藤氏、翻訳者の小林氏のご苦労に改めて敬意を表したい。多くのファンにとって貴重な一冊となるだろう。

八木重吉　（1898～1927）
詩人。南多摩郡堺村相原（現・町田市相原）の自作農の家に生まれる。1912(明治45)年神奈川県師範学校予科（鎌倉校　現・横浜国立大学）入学。17(大正６)年東京高等師範学校文科第三部英語予科に進学。在学中、北村透谷に傾倒し、18年には未亡人である北村ミナ(町田の自由民権家・石阪昌孝長女)を訪ねている。翌年には駒込基督会で洗礼を受け、のちに内村鑑三の感化で、無教会主義の真摯なキリスト教信者となる。21(大正10)年兵庫県の師範学校に英語教師として就職。翌年、島田とみと結婚、長女、長男をもうけるが、二人とも重吉没後に夭逝した。結婚した頃から詩作に専念。25(大正14)年に生前唯一の詩集『秋の瞳』を縁戚でもある加藤武雄(作家)の助力を得て刊行。その後「詩之家」をはじめとする詩誌に作品を発表したが、27(昭和２)年、結核により死去。享年29。
没後、加藤武雄、妻とみ(登美子)、とみと再婚した吉野秀雄らの尽力により、その作品が広く知られることとなった。
町田ゆかりの作家。

【主な寄贈定期刊行物】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸誌）」「三田文学」
詩　誌：「璞（あらたま）」「構図」
短歌誌：「青垣」「歌と観照」「開耶（さくや）」
「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」
俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺（あふりね）」「谺（こだま）」
「都市」「風土」「波」「八千草」「暦日」「あした」
その他：「多摩のあゆみ」「隣人」

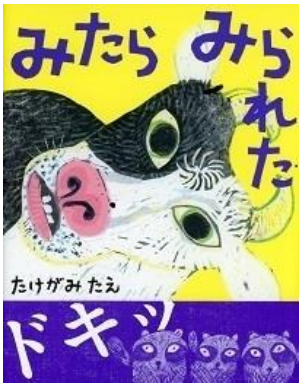
新 刊 紹 介

『創作童話集（十）魔法のえんぴつ』
童話創作の会『魔法のえんぴつ』　2020. 11

（あとがきから）「私、八十才を過ぎました。名作と言われる童話からも、仲間が創る童話からも、しみじみとした情感や若々しい歓喜を、この歳になった今、改めて新鮮に感じています。／外出自粛のこの時期を、お蔭様で、大切に愛おしんで過ごしました」。創作という行為のかけがえのなさが伝わる。

魔法のえんぴつ
2009 年、町田市公民館での「童話創作実践講座」受講生によって立ち上げられたサークル。指導者は町田ゆかりの児童文学作家、国松俊英氏。

『みたら みられた』たけがみたえ／著
アリス館　2021. 1

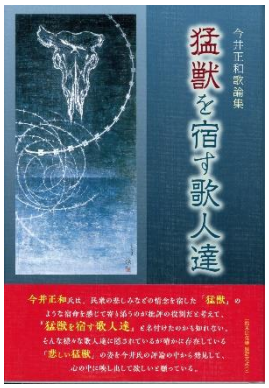


ついに出た！　絵本作家、たけがみたえの真骨頂！だ。ふと目があった生き物たちと、「何かが通じた（気がする）」瞬間が大胆に、心の奥に迫ってくる。「ある、ある、こんな時！」と思えたら、とてもシアワセ。特にタヌキ、ありそう・・・。

たけがみたえ 1986 年生まれ。町田ゆかりの絵本作家。作品に『マンボウひまなひ』『きょうは泣き虫』『うみのあじ』『だんだん だんだん』などがある。

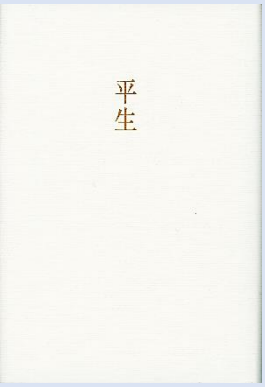
『今井正和歌論集　猛獣を宿す歌人達』
今井正和／著　コールサック社　2020. 12

沖縄の歌誌「くれない」に二〇一六年一〇月から二〇年一二月まで掲載された全五〇回の歌壇時評をまとめたもの。時評というものについて著者は次のように言う。「短歌が内から発せられた言葉である以上、そのぎりぎりの思いを作品に即して汲み上げることが、その作者の生きている現実を描くことにもなる」。その意味で「時評は作品という蝋燭を立てる燭台であらねばならない」。内に猛獣を宿す歌人たちへの、敬愛に満ちた歌論集。



今井正和
1952 年生まれ。87 年「未来」入会、近藤芳美に師事。歌集に『天路』、『聖母の砦』、『野火』など。評論集に『無明からの礫』がある。「まろにゑ」同人、高校世界史講師。町田市在住。

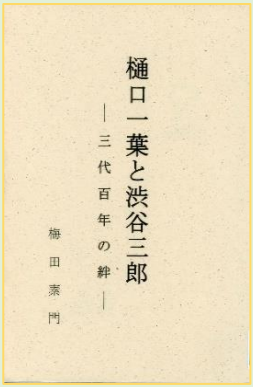
『句集　平生』池田なほ／著
ブックコム　2020. 12



齢九〇を目前にしているという著者池田氏は、町田ゆかりの俳諧師・五十嵐浜藻の曽孫である。若い頃に叔父の勧めで俳句を始め、石川桂郎、八幡城太郎にも句会でまみえたことがあるという。

胸はって泣きじゃくる子や木々芽吹く

「樋口一葉と渋谷三郎―三代百年の絆―」
梅田素門／著　2020

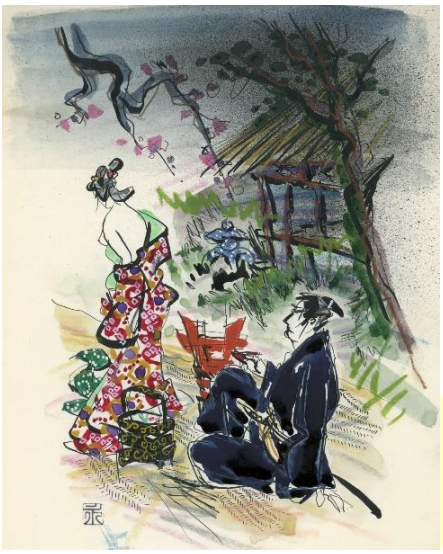


樋口一葉の許嫁であった渋谷三郎（のちに秋田県・山梨県知事を務める）は町田市原町田出身。樋口家・渋谷家の百年に渡る絆を調査・研究によって克明に描き出した労作。著者は町田市在住。

画家三井永一資料登録

わずかな手がかりから挿絵原画の文学作品を探索

川口松太郎▶
『蛇姫様』挿絵



◀柴田錬三郎
『自選眠狂四郎続』より「風流梅花譜」口絵

図１

二〇二〇年三月以降、コロナ禍により予定していた展覧会・イベントの開催が不能となるなか、文学館では所蔵資料の整理・登録を加速させ、充実させることになりました。通常は展覧会業務を中心に担当している学芸員も資料整理に回り、地下収蔵庫で資料と向き合う日々を過ごしました。

今回は、当館に一二年前に寄贈された、三井永一氏の挿絵原画の整理・登録作業について、利用者にはあまり知られることのない文学館の地下階での仕事をご紹介いたします。

挿絵を手がけた洋画家

三井永一氏（一九二〇―二〇一三）は山形県鶴岡市に生まれ、川端画学校、春陽会洋画研究所などで木村荘八、岡鹿之助らに師事し洋画を学びました。師である木村荘八は洋画家として、永井荷風「墨東奇譚」をはじめ文豪の挿絵を描きました。師の影響を受け、戦後、三井氏も挿絵の世界に登場します。

活躍の場は時代小説・剣戟小説・ミステリー小説が中心でした。柴田錬三郎、池波正太郎、早乙女貢、高木彬光、横溝正史作品の挿絵やカバー絵などを多く手がけています。三井氏が世田谷から町田に転居してきたのは一九七七年、五七歳の時。以後晩年まで町田市に暮らしました。

挿絵原画は、文学館が開館した二年後の二〇〇八年、高齢になられた三井さんご本人の希望により、寄贈いただいたものです。その数およそ三百数十タイトル。

受入時に分かる範囲で作品、出版社などを分類し、原画を一枚ずつ保存用のファイルに入れ、保存のための作業は終えていました。しかしその後の整理はそこで止まったままでした。

困難をきわめた「不明資料」調査

文学館が所蔵している直筆原稿等の貴重資料は、町田市立図書館の蔵書検索システムに登録し活用しています。

図書の検索と同様、探している資料の「タイトル」「著者」「出版社」「出版年」などの手がかりを検索システムに入力すると合致する資料がどこにあるか表示されます。なるべく多くの手がかりを正確にシステムに落とし込むことで、探している人に資料が届く可能性を高めることができます。システムに入力すべき情報が「ない」あるいは「欠けている」資料について調べていくのが「不明資料」の調査です。

三井氏が故人のため、多くの時間と労力を要したのが、この不明資料の調査でした。しかも、調査対象が挿絵原画というのが難点でした。

ここでちょっと、想像をしてみてください。

小松左京▶「エスパイ」（「週刊漫画サンデー」掲載）挿絵

◀日本文芸家協会編『江戸恋い明け烏ー新選代表作時代小説19』カバー絵

三井永一資料公開記念講演会・朗読会

三月二〇日(土) 一四時～一六時 講演会
「時代小説におけるヒーロー像の系譜」
三月二一日(日) 一四時～一五時半 朗読会
「柴田錬三郎〈切腹心中〉を読む」
詳しくは町田市広報、ポスター、チラシをご覧ください。

一人の侍が佇んでいる一枚の挿絵原画があるとします。それだけではどうしようもありません。佇んでいる侍が何者で、いつ出版され誰が書いた何という作品の一場面か、見ただけで分かれば早いのですが、原画自体や原画が入っていた封筒、添えられていた手紙などから手がかりをかき集め、候補を絞り、出版物と照合し特定していかなければなりません。

ただ、ありがたいことに三井氏は大変几帳面な方で、多くの原画は掲載誌名などの情報が記され、出版社の封筒に入れてありました。

六ページの図1川口松太郎著『蛇姫様』（立風書房一九七〇年刊）の挿絵原画はその例です。右上に返却先の住所と制作年月日、右下に「立風」「蛇姫」の記載があります。

数多くの連載に挿絵を描いていた自身の整理の為制作時にメモしていたと思われます。また、返却の願いを記しておかなければ、当時は作家の原稿も画家の原画も出版社に届けられた後返却されないのはよくあることでした。

「あった！」と国会図書館で叫ぶ（心の中で）

調査が必要だったのは約一〇〇件。手がかりには次のようなものが挙げられます。

Ⅰ．原画に記された作品名、作者名、出版社名、掲載誌名
Ⅱ．原画に押された制作年月日のスタンプ
Ⅲ．原画が入っていた封筒の出版社名
Ⅳ．原画返却先として記された住所
Ⅴ．落款・サイン

これらが原画ごとにあったり、なかったり。

その他、絵の描き方、描かれたテーマ（侍、歴史上の人物など）を整理してきた自身の記憶と照合し、トランプの「神経衰弱」のようにバラバラになっていたものをまとめることで、手がかりが増え答えに行き着くこともありました。

どの出版物と照合するか、本の候補がある程度絞れたところで、国立国会図書館に行って候補を片端から照合し、確認が取れると晴れて登録となります。担当者二人がかりで雑誌も含め、一日に三〇〇から四〇〇冊に目を通し、資料と同じ絵が載ったページについに行き着いた時は「あった！」と心の中で喜びの声が湧きました。

最終的に三井永一氏の資料は約三〇〇件登録し、公開しています。登録・整理作業など本当は細かな作業もたくさんあり、今回はごく一部の紹介になってしまいましたが、文学館の地下では日々、図書や雑誌、貴重資料の登録が行われています。検索機で図書を探す時など「詳細検索」から「文学館資料」にチェックを入れ、著者名「三井永一」で検索をしてみてください。出番を待つお宝の情報がたくさん表示されます。貸出はできませんが、窓口で申請書を書いて頂ければどなたでも閲覧が可能です。調査・研究などにどうぞご活用ください。

（学芸員　伊藤あや）

ことばらんど お宝紹介

町田市民文学館では、2006 年の開館以降、町田ゆかりの作家の自筆原稿や旧蔵品、絵本の原画などをはじめ様々な文学資料を収集してきました。その収蔵品の中から、市民の皆様にぜひご覧いただきたい“お宝”をサロンにて順次公開しています。

文学サロンミニ展示予定

（原稿・原画保護など諸般の事情により
変更される場合もあります）

ことくん
©中垣ゆたか

らんちゃん
©中垣ゆたか

●石川桂郎

2021・2/16～4/4

市民の皆様の文学作品をご寄贈ください

町田市民文学館では、市民の皆様が著した文学作品（詩歌、小説、エッセイ、児童書や同人誌など）を収集・保存しています。ぜひご寄贈ください。
また、勝手ながら、貸出用と保存用の２冊をご寄贈いただけますと幸いです。今後とも市民の著作の収集に努めてまいりますので、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

桜田常久文庫蔵書目録（和書篇）ができました

目録は館内でご覧いただくことができます。
町田市民文学館ＨＰ（町田ゆかりの作家たち）から
ダウンロードもできます。貴重な資料が多数ありますので、
調査・研究・読書にご活用ください。

「町田の文学」のバックナンバーは町田市民文学館ＨＰ（文学館からのお知らせ）でご覧いただくことができます。

★文学館公式ツイッター
Twitter@machida_kotoba

「町田の文学」第 48 号　2021 年 2 月 1 日発行
編集・発行／町田市民文学館ことばらんど
〒194-0013　町田市原町田 4-16-17　TEL 042(739)3420
FAX 042(739)3421

＊この冊子は 550 部作成し、１部あたりの単価は 183 円です（職員の人件費を含みます）